

幼児の爲に歌を作りて (3)

葛原しげる

時勢の推移につれて、詩の言葉もかはることに

不思議はありませんが、度量衡がメートル法になりましたため、存在の見込の無くなつたのが「竹馬」です。

竹馬

小松耕輔氏作曲

一、竹馬 竹馬 二本脚

細くて 長い竹の脚

二本の脚で コツ／＼と

歩いて行けば面白い

前へ／＼とコツ／＼進め

二、竹馬遊びは ちもしろい

少しも ちつとしては居れぬ

只の一足 三尺四尺

うっかりすると、すぐ落ちる

手足しつかり、コツ進め

(大正幼年唱歌第六集)

第二節の三行目は、もと

一足いつても、三尺四尺

であつたものを、のち、

只の一足 三尺四尺

に直したのです。それは、よいとして、メートル法になりましたからとて、まさか、

たゞの一足 一メートル 一メートル三
ました。

分の一

ともいはれませず、

電車

小松耕輔氏曲

たゞの一足 半メートル 一メートル

一、チン／＼電車が動き出す

も困ります。その上、メートルの単位では、竹馬

ゴ／＼町の真中を

では歩かせぬ。せめて尺ならば、歩幅を計算さ

走つてゆきます、チン、ゴウ／＼

れませうけれど――。しかし、メートル法になつ

御順に おつめを願ひます

てしまつてゐるのですから、もう此の歌は存在價

電車が走る、チン、ゴウ／＼

値を失つたと見るべきでせう。

二、皆さん、電車が曲ります

なりました。

曲りますから御用心

右のと似たのに、「電車」があります。かなり歌

ころばぬ様に つり革が

はれたり、レコードにも入つてゐるだけに困つて

あかない様に 願ひます

をります。その出来た大正四五年頃の車掌の言葉

電車が走る チン、ゴウ／＼

をあまり多く入れすぎましたため、全然、そんな

(大正幼年唱歌第七集)

事を言はなくなつた今は、もう、此の歌曲も、少

くとも東京では存在しえないものになつてしまひ

東京市内でも、電車の出来て間のない頃の、車掌

は、

「御順に おつめを願ひます」

「つり革が あかない様に願ひます」

「曲りますから御注意下さい」

など、ずの分、世話をやいたものです。此の頃でも、くりかへして、

「お互様ですから、真中へ御つめ下さい」

といはれねばならぬ程、出入口だけ立込む事は多いのですが……。

此の「電車」は、どこかのレコードには「チン／＼電車」と改名されて吹込まれてゐました。なるほど、きつと、他にも電車の童謡は出来てゐませうから、紛れないために、それも必要な事であつたかと考へてゐます。

それにしても第一節の起りは

チン／＼電車が、動き出す

でなくて、

走り出す

ではないかとも、今更、案じてをります。

○

よく世間で謂はれた事ですが、名高い人の獨唱は、大てい、外國語でしたから、何の歌だか分らない場合が多いのでした。しかし、時々、日本語の歌を歌はれる事もありましたが、しかし、事實は、それが、日本語と聞えないのさへ少くありませんでした。その原因はいろ／＼ありますが、その聲樂家の發音が妙に外國語馴れがしてゐる爲であつたり、その曲が、日本語のアクセントに合つてゐない爲であつたり、又は、日本語と曲との結合が不十分のまゝである爲であつたり……いろ／＼ありますが、その難を逃れる爲には、時に、副詞句の位置を換えるのでした。

花が たくさん 咲きました

たくさん 花が 咲きました

山から 風が吹いて來ます
風が 山から吹いて來ます

詩としては、此うした副詞の位置の轉換は忽に出來ないのですが、曲の支配を受けて、大して、意味や、語脈に變化のない限り、已むを得ないこととせうか、

皆で 早くおまゐりませう
といふべきを

早く 皆で おまゐりませう
としたのは『お祭り』の第二節の第五行です。これは第一節の第五行の

風も ないのに バタ／＼動く
の對照句でありますので、(三、四、四、三、三)の字脚にするためでした。

また、幟が風に吹かれて動く様は、バタ／＼か

バタ／＼か」といふので、かなり論じましたが、バタ／＼は旗で、小さいので、幟は大きくて、長いから、バタ／＼では弱いといふので、バタ／＼にしました。

又、此うした擬聲の曲は、作曲の方では苦心の多い事とせう。作詞者としては、太鼓の音の如きは、ドン／＼／＼を、「ミ、ド、レ」など、しないで「ド、ド、ド」の如く、低い同じ調子の音にして貰ひたかつたのですが、恐らく、それでは、聲樂にならないのでせう。この歌詞は

一、ヒユラ／＼ヒユ／＼ラ

ドン ドン ドン

向の森から 太鼓と笛が

面白さうに 聞えて來ると

御門に立てた大幟

風もないのに バタ／＼動く

二、ヒユラ〜ヒユ〜ラ

ドン ドン ドン

面白さうに聞えて來るは

お宮の祭りの神樂の囃

天氣も 今日 は 日本晴

早く 皆で おまわりしませう。

(大正幼年唱歌第七集)

○
 幼児の世界の「おまいりごと」さては、「およめ
 さまごつこ」は、勿論、大人の世界の真似ですが
 それに似た「お人形の病氣 は、いかにも、女ら
 しい遊びです。中學校一年生の時、ナシヨナルリ
 ーダーの一で習つた「お醫者さま」の一課……お
 父様の外套、お父様の帽子を借りた小さいお醫者
 様の繪も、

「そのお人形さんは 食べすぎておませんで
 すかな」

といふ問も、まことに、ユーモラスであつた記
 憶が、此の作歌をさせました。

お 客 様

梁田貞氏曲

一、(甲)「お免下さい 花子さん

大變お寒くなりました

皆さん 御機嫌如何です」

(乙)「まあ、ようこそ 雪子さん

こちらへお通り遊ばせな

私の大事な人形が

加減で悪くて 昨日から

ちつとも 笑顔を見せませぬ」

二、(甲)それは、ほんとに 御心配

大變 お風邪が はやります

お熱が たくさんありますか」

(乙)「いゝえ、熱など ありませぬ、

お手々も お足も冷たくて

夜でも お目々を 開いたまゝ、

何も食へずに 寝てゐます。

ほんとに 何うした事でせう」

(大正幼年唱歌第七集)

如何にも大人びた言葉です。しかし、あくまで人形の母になりすましてゐるのですから、此うなくてはならぬと考へました。只、花子が、雪子を迎へて、すぐ、私の大事な人形が、と語る事は、實際には有る事ではありませぬ、日本全國的に考へて

こちらへお通り遊ばせな

も、少し特殊すぎてゐますが、これは、

こちらへお通り下さいな

とかへて歌ふ事も出来ず。又、對話唱歌とし

て、二人で、歌ひ分ける時などは、そのお子さんの實名をもつて、花子さん、雪子さんに變へた方が、よいと考へてゐます。さうした歌詞の訂正は詩歌の本質から申します時は、困るのですが、幼兒の爲には、「自然」に「了解」が伴ふのですから不自然をいとひます意味に於て、プラス、マイナスしまして、全體的の効果は同じである事は信じます。

○

一體に、唱歌とか童謡とかには、やさしいもの美しいものが多く題材となり勝て、元氣のよいもの、強いものは、取り入れられてゐません。しかも、幼兒は、時に、特に、聲張り上げて、思ふ存分、泣かす事さへ必要であるとき々あります程ですから、力の入つた元氣の歌も欲しいといふので、若干作つて見ました。それも、大正幼年唱歌の著作に着手してから二年もたつてから痛感した事でした。

て「軍艦」「大砲」「猿蟹合戦」「進軍」そして、此の「お角力」などです。殊に、お角力は、女兒にさへ取らせて見たいといふ方もある位、全身を錬磨すること、水泳や、和船を漕ぐのに似てゐます。

とまれ、お角力は、勝負の中でも、國技とさへ考へられる程ですから、御反對はないでせう。それで、土俵に上る前の覺悟と、すんだ後の覺悟とを、道學的に歌つたものです。

お角力

小松耕輔氏曲

一、東と西とに分れた角力

向の組は そろひもそろひ

力も強くて 手も早い

敗けない様に しつかりとらう

しつかりく フレィくく

二、何方も敗けずに しつかり取つた

勝つても敗けても威張るな泣くな

皆 同じ仲善よ

明日も又出て、しつかりとらう

しつかりく フレィくく

(大正幼年唱歌第八集)

第二節の「何方も敗けずに、しつかり取つた」と申しましたのは、何れ劣らずしつかり取つた心持です。しつかり取る子に於て、東も西も同じであつた事を意味した積なのですが、うっかりすると、角力そのものが勝負なしであつた様に聞えさうです。

どちらも 本氣で しつかり取つた

とまずべきであつたかと、困つてをります。

それから、此の聲援の「フレィくく」は一體、何の事でせう。もし「プレイ」ではないのでせうか、英語の「プレイボール」のプレイかとも

思つて、いろ／＼の方々にお尋ねしてみたのですが、

奮へ——ふるへ——ふれい

ではないかとの説もあります。勿論、

しつかり／＼

の意味に使ふ事が多いのですから——。

又ある方は、

振れ／＼

とも仰有います。聲援の旗を、帽子を、ハンカチを、振れ／＼といふのでせう。ところが、某博士の編にかゝる新しい辞典で、しらべますと

振への轉音か

とあります。博士も決定しかねてをられます。

更に外來語辭典にでも「ブレイの轉音か」ともありはせぬかと、未だ氣にかゝります。

○

宇宙間のあらゆる存在物の中で、何が一番偉大

で、何が一番不思議で、又、何が一番有り難くて

——と、いろ／＼考へられるだけ考へてみます時太陽が、その一つでありました。太陽を禮拜する事は、野蠻人種のみではないのです。

その「太陽」の歌は、いろ／＼その後も作つて見ました。中には、最高級の言をならべて、

燦爛として 輝きてあり

炎々として 燃えてあり

千年 萬年 千萬年を

高き 高き あり太陽

熱と 光 力の基

太陽こそは 世の限り

千年 萬年 千萬年を

高き 高き あり太陽

ともいつてみましたが、まだ、謂ひたい事が多

く残つてゐます。これを、幼児向に、これより十
數年前に、「お月様」(梁田貞氏曲)と題をきめて

キラ キラ キラ 東に出て

ギラ ギラ ギラ 西に沈む

キラ キラ キラ

ギラ ギラ ギラ

東に出て

西に沈む

キラ キラ キラ 東に出て

ギラ ギラ ギラ 西に沈む

(大正幼年唱歌第八集)

といった事があります。只、「キラ」と東に出て
と「西に沈む」の反覆に「ギラ」とすぎないので
すが、これで、太陽の不思議は謂つたつもりで
ゐます。それより、

朝日が、キラ／＼で

夕日が キラ／＼ ではないか
とも案ぜられるのですが、如何でせう。

瀧田卯夫・山田俊次氏共編

新 作 昭 和 童 謡 唱 歌

瀧田卯夫氏は音楽専門家、山内俊次氏は東京
女子高等師範學校附屬小學校訓導にして音
樂、殊に兒童幼兒の唱歌に造詣が深い。この
兩氏が小學校幼稚園用として編まれた本集に
は自ら小學校幼稚園の唱歌として適切なもの
がある。更に、各歌曲には指導上の要領、參
考資料が詳細に記述してあるので使用に便利
である。たゞ全部が幼稚園に適切とはいかぬ
が、幼稚園用と指示されたものには、まことに
好適なものがある。

(各冊十二曲、三十五錢。全六冊、東京市
京橋區入舟町五)

明治圖書株式會社發行